大和町文化財保護協会総会記念講演

「全国に拡がった千葉一族」

日時　平成２８年５月２８日＝土＝
場所　郡上市大和生涯学習センター
講師　　鈴木　佐

１　はじめに（郡上訪問が私の人生を変えた。）

①昭和６１年１０月　高校２年生のときに大和町へ
②野田直治先生　木嶋泉女史　大和町・八幡町職員との出会い
③千葉県職員へ目指す。千葉氏サミットの構想、千葉氏顕彰会の創立。
④五山文学への傾倒　建長寺調査員拝命

２　千葉常胤及び千葉一族の功績

①常胤及び一族の功績　　資料１・２

・「吾妻鑑」に出てくる千葉常胤　頼朝の第２の父
・頼朝の背後にいた鎌倉政権の実力者である。三浦義澄とともに！
・幕府最高の勲功
・頼朝に相模国鎌倉に源氏の本拠をおくよう進言。
　頼朝は安房国に源氏の本拠を作ろうとした。「安房時代」と呼ばれていたかもしれない。

②常胤の「光」と「影」
「吾妻鑑」について
　北条氏と提携した千葉氏　勝者・北条氏の歴史の中で「吾妻鑑」が作成された。
　「吾妻鑑における千葉氏」についての記述は「劇的」な感が強い。
　　→　気をつけて読まなければならない。
　　対比する「延慶本平家物語」・・・・物語であるが吾妻鑑と違った常胤像が出る。
　　それと比較して「常胤像」を明らかにしていかなければいけない。

光の部分　　・「時代の最先端を読んでいた」「戦略家」
影の部分　　・「武力をもつ集団の長」。「武士」とはどういうものか？
　　・常胤の成功の裏に泣いた一族もいる。
　　上総介廣常　臼井常康　千葉一族以上の実力があった

３　常胤の子孫たちがもたらした地方の文化

①千葉氏がもらった所領　資料３

②各地に千葉氏の文化　資料４

九州千葉氏　小城の祇園会　鍋島藩の礎
相馬氏　相馬野馬追　６００年続く大名家
武石氏　涌谷妙見祭り　伊達藩に仕えた２万４千石
大須賀氏　いわきのじゃんがら念仏
東氏　古今伝授・五山文学

③鳥取県智頭町の事例　荘園侵奪者・東氏（千葉氏）の事跡で町おこし？！　資料５
＝千葉氏の歴史を注視すべき　プラス面だけではなくマイナス面を知ってからでの「常胤を英雄視すべき」である。＝

事例：侵奪者・千葉一族で町おこしをする事例「七人の侍」でモチーフになった鳥取県智頭町

歴史を伝承だけでなく、科学的な裏付けのもと。現代の顕彰は昭和30年代と代わりばえしない。千葉氏＝神格化すべきではない。千葉氏のプラス面とマイナス面の両方を知った上での行動をすべきである。

４　千葉一族がもつ魅力（文化力・国際交流力）

①国宝に描かれた千葉一族　資料６

・千葉は念仏（浄土宗）王国
・国宝　法然上人絵伝
・東京都　増上寺　資料７

③13世紀に東アジアに飛躍した千葉一族＝世界に羽ばたいた千葉一族）　資料８

・京都に月星紋の寺あり　建仁寺両足院
　・京都女子大学　野口實教授から御教示

了行上人
　西園寺家の帰依　入宋（中国）　貴重な経典を日本に持ち帰る
道源上人
　九条家の帰依　入宋（中国）　吉田兼好とも交流。「徒然草」にも記述あり
　那蘭陀寺を創建

５　最後に

郡上市は「東西文化が融合する地域」である。

東氏	鎌倉武士	公家社会と密接	
遠藤氏	東氏の流れ	浄土真宗の理解者	
青山氏	丹後半島	先祖は群馬？　千葉？	
白山信仰	平泉との交流	石徹白氏と東氏	平泉と奥州千葉氏

余談　美濃国における千葉氏

【１】常胤　頼朝に美濃国蜂屋荘（岐阜県美濃加茂市）を所望する。

吾妻鑑に記載あり。常胤が頼朝におねだりするが、あきらめてほしい旨、頼朝に告げられ、涙を流して、あきらめるシーンが描かれている。

※美濃国蜂屋荘は、千葉氏の太祖・平忠常の逝去地ではないか！
※美濃国垂井には伝承地として、平忠常の墓所がある。

【２】土岐光行の室は千葉氏息女

諸説あり、千葉常胤息女　千葉成胤息女、千葉泰胤息女説

東胤頼息女説が有力・・・・承久合戦の後、土岐氏許される。

【３】土岐頼忠が帰依した平心処斎（覚源禅師）

美濃国を遍歴、美濃国上野で没す。
東胤頼の玄孫。建長寺開山・蘭溪道隆の法孫。
長蔵寺・順心寺（美濃市）、禅蔵寺（池田町）を開山

【４】大垣市北方地区に「千葉常胤の末裔を称する内田氏」が住す。

【５】江戸時代　美濃国の諸大名に仕えた千葉氏について

① 苗木藩・遠山家　・・・・　次席家老・東氏（千葉氏）
② 岩村藩・大給松平家　・・　松平乗美の生母・千葉氏
③ 木曽福島代官　・・・・・　剣術指南役　遠藤氏

資料1

A 治承4年9月9日の項

「頼朝の招請により源氏再興に涙す。頼朝に鎌倉を源氏の本拠するべきことを進言する。」

九日、戊午。盛長自二千葉一歸参申云、至二常胤之門前一案内慮、不レ經二幾程一、招二請手客亭一。常胤乗以在二被座一。子息胤正・胤頼等在二座傍一。常胤具聞レ申二盛長之所レ述、猶不レ發レ言。只如レ眠 而作二両息向曾云 武衡・泉冠二兒等跡一、領二狼藉一給。結宜勿有二其召一。服部何及二猶豫一哉。早可レ被レ獻二領状之奏聞一。常胤之心中、領状更無二異儀一。令レ與二源家中絶跡一給之條、感涙遮レ眼。非二言語之所レ及也一者。其後有二酒宴一。次、常時御居所、非二指要客地一。又非二御旋跡一。速可レ令レ出二相模國住人一給。常胤相二語門客等一、爲二御迎一可二參向一之由、申レ之。

B 治承4年9月17日の項

「千葉一族、下総国府にて頼朝と参会。頼朝、常胤を第二の父と呼ぶ。」

十七日、丙寅。不レ待二廣常參入一、令レ向二下總國一給。千葉介常胤相二具子息太郎胤正・次郎師常等一、・四郎胤信・五郎胤道・六郎大夫胤頼・孫小太郎成胤等一、參二會于下總國府一。從輩及三三百餘騎一也。常胤先召二囚人千田判官代親政一、次獻二數領一。武衡令レ招二常胤於座右一給。須以二同思一爲二父之由一、被レ仰。云云 常胤相二伴一、一驚延、進二御前一云、以レ之可レ被レ用二御附物一。云云 是、偖與六郎義隆男號二毛利冠者一頼隆一也。齋二耕村濱館一直去平治元年十二月、於二大合山一被レ誅。義隆故左典厩、弃レ命。于レ時、頼隆遺生之後僅五十餘日也。而被レ處二件條坐一、永暦元年二月、仰二常胤一配二下總國一。云云

C 元暦2年3月11日の項

「頼朝、西海転戦中の範頼に書状を送る。常胤の功労を賞する。」

三月大十一日、甲午。被レ遣二參州御返報一。（中略）自二關東一所レ被二奉遣一之御家人等、皆悉可レ被二褒賞一。就レ中、…千葉介常胤不レ顧二老骨一、堅忍旅泊之條、殊神妙。抜二彷徨一可レ被二賞翫一者歟。凡於二常胤大功一者、生涯更不レ可レ遂二報謝一之由。云云

D 文治5年8月25日

「奥羽合戦において東胤頼、藤原基成父子を生け捕りにする。」

文治5年9月20日

「奥羽合戦の勲功に際し、千葉常胤を一番最初に召す。」

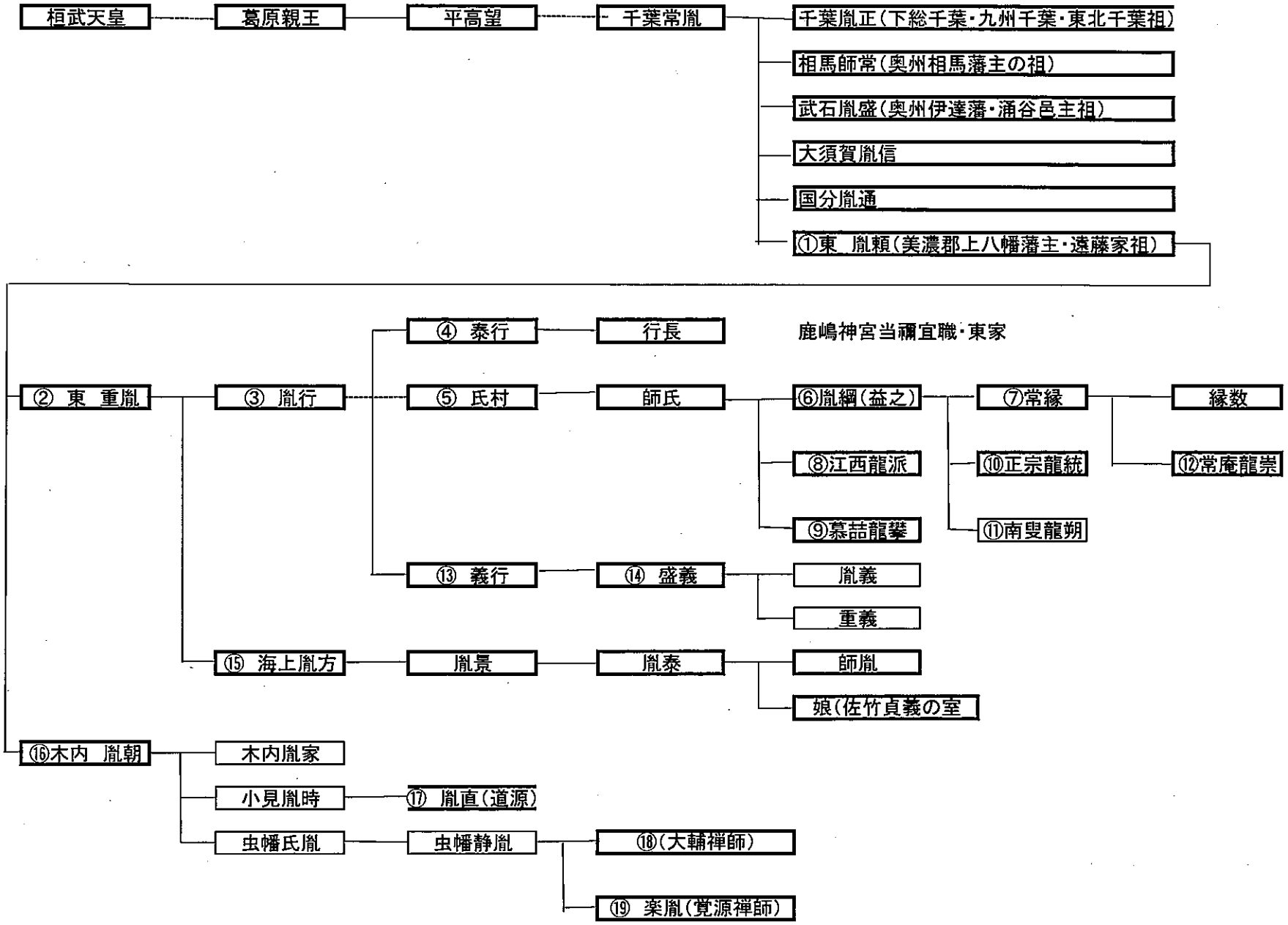
廿五日、壬子。泰衡逐電之間、分二遣軍兵於方々一、雖レ被レ捜二尋之一、未レ知二其勢存亡一。仍、猶可レ進二発奥方一之由、有二其定一。今日遣二千葉六郎大夫胤頼於衣河館一、召二前民部少輔基成父子一。胤頼欲レ生二捕彼等一之處、基成不レ及レ取二兵具一。束手爲二降人一。然間、相二具之一參上。子息三人同從レ父。云云

廿日、丁丑。奥州・羽州等事、吉凶結之後、私二勇士等勲功一、各被レ行レ賞訖。其御下文、今日被レ下レ之。或先日被レ定二置之一、或今所レ被二遣下一也。而千葉介、衰前邦二領之一。凡毎レ施レ恩、以二常胤一可レ爲二初之由一、蒙二兼日之約一者。云云 先、國中佛神事、任二先規一、勤二仕之一。次、於二金師等一、不レ可レ成二濫觴之旨一、被レ仰二含于浴恩之輩一云云（下略）

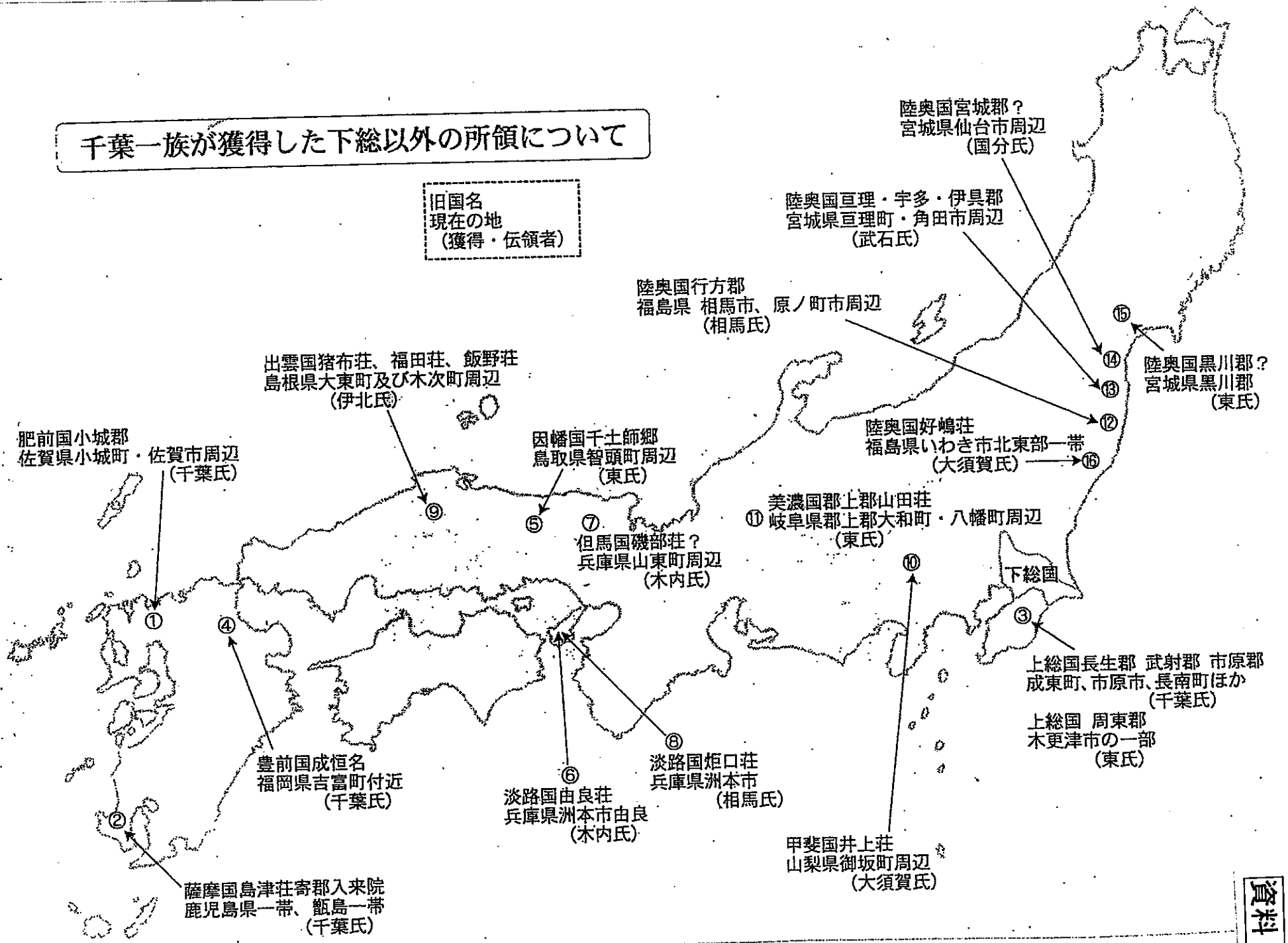
「吾妻鏡―国史大系―」から抜粋

千葉氏・東氏略系図

資料2



千葉一族が獲得した下総以外の所領について



資料3

資料５

「七人の侍」智頭で満喫（朝日新聞 2007-10-13）

◇今日から３１日まで　屋外上映会やシンポ

黒沢映画で観光客を呼び込もうと、屋外上映会やシンポジウムなど多彩な催しを展開する「『智頭町古文書』と『七人の侍』」が１３日、智頭町で幕を開ける。黒沢明監督の代表作「七人の侍」（昭和２９年＝１９５４）は鎌倉時代の同町那岐地区が舞台との仮説をもとに、町民が実行委員会を起ち上げ、準備を進めてきた。映画の著作権を持つ映画会社が「智頭町が舞台と断定できない」と映画の上映などに難色を示す一幕もあったが、熱意で協力を取りつけたという。３１日まで。

称名寺領千土師郷（同町那岐地区）の百姓が、「悪党」と呼ばれた野武士から村を守るため、８人の侍を雇ったとの記述が、横浜市に現存する金沢文庫所蔵の「称名寺文書」（暦応５年・康永元年・興国３年＝１３４２）にある事に村尾康礼・町誌編纂専門員が注目。「七人の侍」に似ていると約３０人の町民が今年５月、実行委を発足させたという。
黒沢監督と親交があった俳優の油井昌由樹さんからも協力の申し出があり、同町も約４８０万円の事業費を予算に計上。黒沢作品の上映会や同町大背に残る中世山城（やまじろ）の復元などの企画を練ってきた。
ところが、９月中旬、「七人の侍」の著作権を持つ映画会社「東宝」が映像の提供に難色を示したという。同社広報室は「『七人の侍』は東宝だけでなく日本映画界の大切な作品。映像を提供すれば、智頭町が七人の侍の舞台と、お墨付きを与えてしまう事になる」と理由を話してくれた。

織田洋町長や副町長、企画財政課長ら町幹部が上京し９月２７日、油井さんも交えて担当役員と話し合った結果、１０月３日夕、「七人の侍の舞台の町と、はっきり打ち出さない事」を条件に、同社からフィルムでなくＤＶＤなら提供すると連絡があった。同社広報室は「１１月に発売する黒沢作品の廉価版ＤＶＤシリーズのプロモーションの一環」と説明している。

油井さんは「このイベントをきっかけに、全国を行脚して子供たちに黒沢作品の良さを伝えていきたい」。織田町長は「東宝側に熱意が伝わったと思う。智頭町の豊かな自然や歴史や文化をアピールしたい」と話している。問い合わせは町企画財政課へ。
（以下　略）

法然上人八百年大遠忌記念

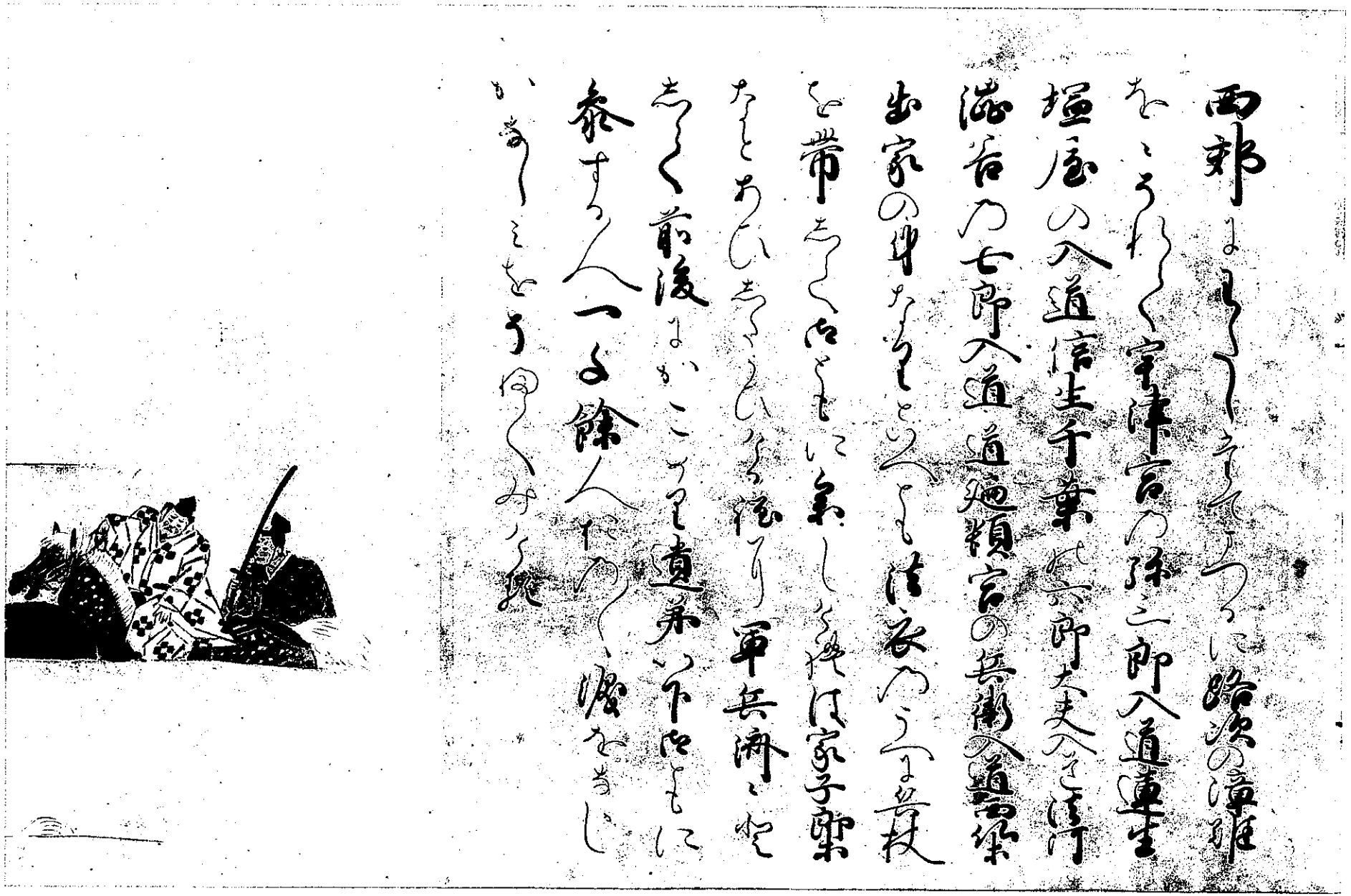
国宝
法然上人行状絵図 Ⅳ

第三十七巻～第四十八巻

（四十八巻伝・知恩院蔵）

法然上人絵伝集成 4

総本山知恩院
浄土宗



第４図

資料7

浄土宗第八祖西誉聖聡上人

相次ぐ戦乱に人心荒び、御仏を敬う心すら衰えようとしていた室町時代中頃、増上寺を開いて人々の教化と教学の発展に努めた上人。その足跡は全て、浄土宗の今日の基礎を固めるものであった……。

誕生

西誉聖聡上人は、貞治五年(一三六六年)七月十日、関東に移り住んだ平氏の末裔千葉氏胤を父とし、南北朝の乱で滅んだ新田義貞の娘を母として生れた。幼名を徳寿丸と言い、幼くして〝天性聡敏〟の評を得たと伝えられる。

しかし、徳寿丸は生れながらにして不遇だった。父氏胤は徳寿丸誕生後、まもなく入寂。母方の一族も滅び、後ろ盾となるべき人はなかったのである。

出家

加冠して胤明と名乗った徳寿丸は、文中二年春、九才のときに領内の千葉寺において剃髪し、真言密教の学問研究を行なった。千葉寺は、現在の千葉市妙見寺であり、千葉氏一族の帰依を得た代々の祈願所であった。

一心に研鑽に励んでいた聖聡上人に転回の期が訪れたのは、至徳二年(一三八五年)のこと。すなわち、浄土宗第七祖にして後世中興の祖と称せられた了誉聖冏上人が行なった法話を聞き、直ちにその門下に入ったのである。

以来九年、聖聡上人は聖冏上人に師事し、浄土法門の奥義を学んだ。

研鑽

師聖冏上人は、自著『浄土二蔵二教略頌』を授けたのをはじめ、『決答授手印疑問鈔』『授菩薩戒儀則』『領解授手印徹心鈔』など、聖聡上人に浄土宗の重要な伝書を次々と授けていった。聖冏上人がいかにその器量を認めていたかを示す事実だが、聖聡上人も良くその期待に応え、教義の本質を摑むため懸命の研鑽を重ねた。

明徳四年(一三九三)十二月、聖聡上人は五重の宗脈を伝え受け、「汝法器たるに依って悉く伝授しおわんぬ」と印可された。これによって聖聡上人は、法然上人、弁長上人、良忠上人、良暁上人、蓮勝上人、了実上人、そして聖冏上人と続く宗脈を継承して浄土宗第八祖となったのである。

開創

明徳四年十二月、西誉聖聡上人は二十八才にして三縁山増上寺を開創し、不断念仏道場とするとともに、自宗他宗の僧知識を集めて浄土宗の奥義を研究する伽藍とした。

増上寺に集まり来る諸国の学僧を指導するかたわら、聖聡上人は、無量寿経を注釈したその代表的著作『大経直談要註記』など数多くの書を著した。また応永三十四年(一四二七)には六十二才にして遠く吉野に旅し、諸寺の曼陀羅絵をつぶさに研究した後に、『当麻曼陀羅疏』を著している。

こうして布教に指導に多大な努力を傾けつつ著した著書は、実に二十六部百五十巻余を数える。いずれも現在の我々浅学者の心眼を開かしめる名著と言ってよい。

入寂

永享十二年(一四四〇)七月十八日聖聡上人は、多くの弟子たちに囲まれつつ、その休むことなく教化にいそしんだ生涯を終え入寂された。

他宗に対しては浄土宗の正統を打ち立て、自宗にあっては教義の確立、五重伝法の普及にあたった上人の全活動は、その後の浄土宗の発展に不可欠であったと言えよう。

さらに、聖聡上人門下からは傑出した弟子たちが輩出した。聖聡上人を嗣ぎ増上寺二世となった酉仰上人。後に京都に上り、知恩寺十九世、知恩院二十一世となった慶竺上人。三河地方に大運寺を創建、浄土宗の布教に大きな貢献をした了暁上人などである。弟子たちがまた、今日の浄土宗の基礎を固めた。

酉誉聖聡上人は、その師聖冏上人とともに、実にわが浄土宗中興の上人なのである。

資料8

御開山龍山徳見禅師六百五十年遠忌記念

両足院

―その歴史と文化財―

両足院開山・龍山徳見和尚の生涯について

両足院のご開山様は龍山徳見和尚です。今年はお亡くなりになって六百五十年になります。龍山和尚について、知られざる姿についてご紹介しましょう。

一、生誕地

龍山徳見和尚の生誕地は、下総国香取郡、現在の千葉県香取市・東庄町にかけての地域です。千葉県の北東部に位置し、茨城県とは利根川で接しています。

具体的に生誕地は、明確なことが解っていません。故郷の山・龍神山から「龍山」と命名したことから、東庄町にあった龍神山の周辺もしくは龍神山が見える城館で生誕されたといわれています。現在、龍神山は削られ、龍神台となっています。

二、生家・千葉氏

龍山和尚の生家・千葉氏について説明してみましょう。和尚自身も「千葉氏」と称しています。しかし、父が千葉氏の誰であるのか、父母の名も記していません。

何故、ここまで出生地や父母の名を記録に残さなかったのか。これは禅僧が出家する際に、世俗のことを一切忘れることが重要で、和尚もこのことを徹底していました。

さて、千葉氏は、桓武天皇の流れを汲む関東武士です。天皇の五代孫・高望王が「平姓」を賜い、「従五位下上総介(現在の千葉県知事に相当)」に任じられ、上総国(現在の千葉県)に下向します。その五男・平良文の子孫が房総半島に土着し、千葉氏となります。関東の英雄・平将門や、武士で始めて太政大臣になった平清盛は同族です。

良文から六代目の平常重のとき、下総国千葉荘(現在の千葉市)に館を築き、「千葉」を姓とします。その子が「源頼朝の第二の父」といわれた千葉常胤です。彼は、千葉市の基礎をつくるだけでなく、頼朝のために尽力し、幕府の本拠を鎌倉におくよう進言し、数々の武功をたて、鎌倉幕府の創建に大きく貢献します。その功績が認められ、全国に各地に領地を与えられ、子孫が反映します。

三、両足院の寺紋・月星紋について

さて、両足院の屋根瓦にある紋は「月星紋」といいます。さて、この由来はなんでしょうか。徳見の生家・千葉氏の家紋です。千葉氏の守護神は、「妙見尊星王」、一般的に妙見菩薩と呼ばれています。関西地方では、延暦寺や三井寺にも「妙見堂」がありますし、大阪の能勢妙見山は妙見菩薩を祭っています。妙見菩薩とは、「北極星と北斗七星」の変現です。かつて、東国武士や、牧場を管理する役人、海上交通に携わる人たちが崇敬していました。この妙見菩薩を形象化したものが「月星紋」です。本来の紋は「月に九曜紋」と「十曜紋」を使用していましたが、時代の変遷とともに変化していきました。

古い時代の「月に九曜紋」「十曜紋」　　時代の変遷と共に「月星紋」「九曜紋」へ

大正八年に千葉町が「市制施行」したときに市の名称を付ける際、千葉氏の功績から「千葉市」と命名したとあります。その名残として、現在でも使用されている「市章(左下)」は千葉氏の家紋、月星紋からとったものといわれております。

四、龍山徳見の父母について

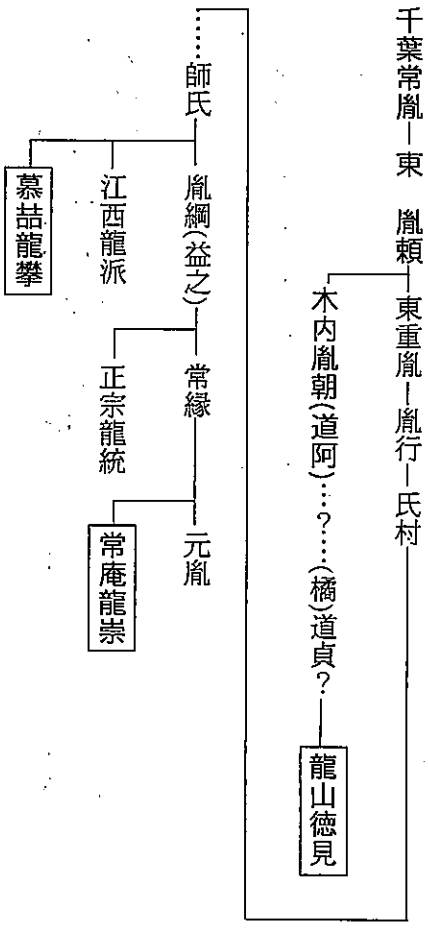
ところで龍山徳見(以後「徳見」に統一)の父母について、探ってみましょう。その父母について、興味深い話が残っています。香取郡は、下総国一宮・香取神宮の領地でした。千葉一族も崇敬が深く社殿修理を行っています。「香取郡誌」には、徳見の両親も、日頃より香取神宮を信仰していました。子供がいなかったため、祭神・経津主命に祈願したところ、日輪が母の口から胎内に入り、授かったのが徳見であったといいます。

徳見は、千葉氏の中でも、香取郡東部に勢力をはっていた千葉常胤の六男・東胤頼の子孫と考えられています。胤頼は、文武に優れ、神護寺の文覚上人と師弟関係を結び、上人の推挙で上西門院に仕え、父兄の中で唯一「従五位下」に任官、六郎大夫と呼ばれています。父兄とともに、源平合戦・奥州藤原氏の追討につくし、下総国橘荘と三崎荘(今の香取郡から銚子地方)を始め、宮城県や岐阜県郡上郡にも領地を与えられます。特に橘荘は、「新古今和歌集」で有名な藤原定家の所領であったため、定家とは和歌の師として、または領主・地頭という関係でも深くかかわりをもちます。

胤頼の子には、源実朝の近臣となり、無双の近仕と呼ばれた長男「東重胤」と、承久合戦で武功をたてた次男「木内胤朝」の二人がおります。因みに重胤の子・胤行は藤原定家の孫娘をめとるなど、京都との関係も強くありました。

地元に残る「香取郡誌」には、徳見の父の名前を「橘道貞」と記載しています。これは何を意味するのでしょうか？「橘(荘＝地名)道貞(法名)」と解すればわかります。当時、「道」の法名をもつ一族は「東氏の分流・木内胤朝の一族」です。この胤朝自身も「道阿」の法名をもち、その子・木内胤家は『道淳』、胤長は『道暁』、胤盛は『道胤』の法名をもっています。徳見は「木内一族」の出身の可能性が考えられます。

《千葉氏・東氏略系図》



五、禅僧への道

徳見は、最初「利見」という名で、十二歳のころ、鎌倉五山の寿福寺に入り、禅僧の道を歩み始めます。最初の師は、寂庵上昭(黄龍派)で、明庵栄西(建仁寺開山)の法孫です。当時、円覚寺では中国からの稀代の高僧・一山一寧和尚がおりました。彼に参ずるものが後を絶たずの状況でした。そこで彼は、漢詩文の試験を行いました。そこでトップで試験をパスしたのが利見です。一山の下、円覚寺で禅と漢詩文を勉強します。一山は、利見の才能を見抜き、中国への渡航を薦められ、中国へ単身渡ることを決意します。

当時の中国は元王朝。正式な国交はありませんでしたので、密航となります。この時の渡航費用は、千葉一族によって出されたことが推定されます。また九州の肥前小城には同族千葉氏が禅宗に深い帰依をしていましたので、相当の援助があったものと思われます。

六、中国に渡航した徳見

密航した利見は中国・寧波に上陸します。この時、利見は心情を次のように述べています。「古人為法亡躯。今正是時」(かつて、いにしえの人は仏教を学ぶために身を滅ぼした。まさに今、いにしえの人を見習うべき時が来た)と強い意志を述べています。

そこで天童寺に行こうとしますが、官憲の厳しい監視があり、城壁を越え、中国人商人宅に入り込みます。利見は筆談で商人と通じます。この商人夫妻は、日本から命を賭して天童寺の東岩浄日和尚に教えを請う利見に感動しました。この商人夫妻は東岩和尚の信者であったため、夫妻の引導により、中国天童山に入ります。そして、東岩浄日和尚に仕え、勉学に励みます。東岩から「徳見」の名前を与えられます。

しかし、寧波では日本人商人と官憲の対立がおきたため、官憲により、徳見も拘束の上、洛陽の古寺・白馬寺に監禁されます。このように徳見の中国における生活も平坦なものではなかったようです。赦免を受け、天童寺の東岩和尚のもとに戻りますが、和尚は既に死去しており、しばらくして、雲岩寺の古林清茂のもとで漢詩文を学びます。その後、各地を遍歴の後、廬山東林寺では「経蔵役」に任ぜられます。

そして苦節の末、元王朝から正式に認められ、黄龍慧南の弟子・兜卒従悦の霊場である兜卒寺の住持に任命されます。官寺の住持で日本人の任命は異例のことで、これが初めてとなります。徳見は、中国に途絶えそうになっていた臨済宗黄龍派を再興し、中興の祖となった人物です。通算して四十年の長きに亘り、中国で過ごすことになります。

この中国逗留時代の徳見のもとを訪ね、死去するまで親交を重ねた日本人が二人おります。建仁寺住持となり、五山文学に大きな足跡を残した「中巌円月」や、京都福知山に天寧寺を開き、広島に臨済宗佛通寺派の基礎を築く「愚中周及」です。特に中巌は、「東海一漚集」の中で徳見の文化的功績を書物で示し、国内に広めます。

七、現在に残る中国江西省・兜卒寺

徳見の遺跡・兜卒寺は今どうなっているのでしょうか。筆者は、平成九年に、千葉賢胤師(埼玉県川口市・乗性寺知足院住職)と共に、日本人で初めて兜卒寺を訪問しました。

成田空港から上海空港へ、上海空港から一時間で江西省の省都・南昌へ到着。南昌から約十二時間自動車で移動し、江西省九江市修水県・修水に到着しました。修水は、有名な漢詩文の大家・黄庭堅の生地です。さらに自動車で一時間で「修水県渣津」という小さな町に着きます。この町から龍安山の麓まで車で行き、徒歩二十分足らずで、「兜卒寺」に着きます。

村人は、初めての外国人の訪問に驚き、列をつくって、私たちについてきました。寺では爆竹をならすなど、大歓待。住職は住んでおらず、「本仙」という名の尼僧様が応対してくれました。残念ながら文化大革命の影響からか、一部焼けこげた痕がありましたが、徳見時代の礎石と石段が残っていることを伺いました。さらに寺の後ろには清朝乾隆帝の時代に建てられた開山・兜卒従悦の塔が建立されて守られていました。地元の方々と読経と合掌をし、言葉が解らなくても地元の方々と心が一つになった時間を過ごしました。

八、日本への帰国、故郷千葉への思い

建武の新政崩壊後、室町幕府を創設した足利尊氏・直義兄弟の招きにより、徳見もようやく帰国の途につきます。この帰国の際に、徳見を慕って日本に渡海したのが林浄因です。

浄因は孤高の詩人・林和靖の末裔です。浄因の曾孫・文林寿郁は知足院を守り、両足院を創建しました。林家からは累代、両足院住持を輩出し、徳見の遺志を守り続けます。さらに浄因は、日本に「饅頭」を伝え、その末裔が老舗「塩瀬」をおこすなど、食文化に重要な功績を残しています。

徳見は、足利氏の奏請により京都に戻り、天竜寺・南禅寺・建仁寺の住持になります。この間、夢窓疎石の弟子、絶海中津・義堂周信など

後進を指導します。

徳見は、故郷千葉への思いがありました。京都から離れなくなった徳見の意思を継いだ法嗣の一人・大航慈船は、師が渡航で世話になった千葉一族への御礼と弔いのためでしょうか、下総国の花島観音に籠もります。後に、千葉一族の後見役・国分胤詮のために、下総国香取郡に黄龍派寺院「大龍寺」(現在香取市与倉)を建立します。

九、徳見の最後

延文三(一三五八)年、十一月に徳見は軽い病気に罹りました。そこで自ら東山建仁寺に行き、墓穴を自ら掘って、棺桶がわりに甕を埋めたと伝わっています。そこで、その数日後に死期を悟った徳見は「西涌東没　南往北来　末期一句　掘地深埋」と書いて遺偈としました。「西に涌いたかと思うと東に没する。南へ行ったかと思うと北へやって来る。最後のわかれの一言　地面を掘って深く埋めなさい」

そして遺偈に「十一月十三日」と署名して泰然自若として世を去りました。その遺言どおり建仁寺に全身のまま葬られました。その法嗣・天祥(一庵)一麟により、両足院の前身・也足軒と霊泉院(現在の霊源院)が建立されます。

十、徳見の遺志を引き継いで

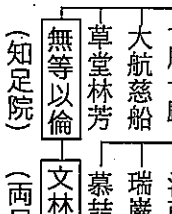
(一)　徳見の法嗣たち

龍山徳見の弟子の中で、教えである法を忠実に守る人を「法嗣」といいます。数多くいる法嗣の中でも「一庵一麟」「草堂林芳」「大航慈船」「無等以倫」は、特に活躍しました。

徳見の第一の高弟、一庵は、建仁寺住持をつとめ「霊泉院(後の霊源院)」を起こし、その法脈は、慕喆龍攀や常庵龍崇などに引き継がれます。無等も建仁寺住持をつとめ、「知足院」を守り、文林寿郁が「両足院」を建立しました。

大航は徳見の遺志を引き継ぎ、関東に下り、千葉氏のために尽力します。また鎌倉五山第三・寿福寺の住持となります。草堂もまた、鎌倉で活躍し、鎌倉五山第一・建長寺、寿福寺の住持となります。

《臨済宗黄龍派法脈図　「龍山徳見」以降の法を繋ぐ人々》　＊血筋はありません



(二)　五山文学を継承した義堂周信・絶海中津

義堂・絶海は夢窓疎石国師の弟子ですが、彼らにとって国師亡き後、「心の支え」と慕ったのは龍山徳見といわれています。この二人は、徳見仕込みの漢詩文を体得し、後世から「五山文学の双璧」と讃えられています。

(三)　高僧を育てた美濃千葉一族(東氏)

徳見にとって、千葉一族の身内からもその精神を継承する方々が出ます。「江西龍派」「慕喆龍攀」「正宗龍統」「常庵龍崇」です。彼らは、建仁寺の禅僧としての顔だけでなく、五山文学者、足利将軍家の政治顧問、そして教育者としての顔も持っていました。その教育者として、偉大な人物を育てた「龍攀」と「龍崇」について記してみます。

◆慕喆龍攀(別名「慕喆攀公」)と一休宗純

東(千葉)師氏の子供。若き日の一休宗純和尚の師匠として知られています。一休は若き日の名を「周建」、多感な十三から十六歳までをこの建仁寺で過ごします。このとき、手習いなど全てにわたり、教育したのが龍攀でした。龍攀は千葉氏の流れをくんでいますが、まさに関東武士の気概を常にもっていた人でした。権力に抵抗したため、五山住持に出世できず、蔵主で生涯を送りました。周建はこの龍攀から漢詩文だけでなく、その人生も学び取ったようです。

また次のような逸話も残っています。周建は「まわりの僧が自分の生い立ちばかり自慢している。禅僧とは世俗から離れ、お釈迦様の子となったのに、なぜ生家にこだわるのか」と心情を偈に託し、龍攀に吐露しています。龍攀も「今日の寺は頽廃が激しい。一人で立て直すことは難しい。三十年辛抱しなさい。そのときにこそ、周建の思いが実行される時である」とたしなめます。龍攀と周建は心を通じた師弟であったことがわかる話です。

◆常庵龍崇(崇長老)と太原雪斎

東常縁の末子、建仁寺住持。現在、ＮＨＫ大河ドラマ「風林火山」で伊武雅刀さん扮する「雪斎」と谷原章介さん扮する「今川義元」という歴史上の人物が登場していますが、この雪斎を育て、若き日の義元と深い関わりをもったのが龍崇です。

雪斎こと「太原崇孚(雪斎)」はこの崇長老(龍崇)に十六年間仕えました。まさしく雪斎は建仁寺で育った人です。崇長老の下で禅僧として、更に漢詩文を極めました。これは後に駿河国の戦国大名・今川氏の文治政策にも大きな影響を与えます。雪斎の能力を評価したのが駿河国守護の今川義親でした。その息子・方菊丸の教育者に選ばれます。この方菊丸とは僧を経て、戦国大名となる今川義元です。義元は、剃髪・得度して一時期僧侶になりますが、剃髪したのが崇長老なのです。

しかし、十六年仕えた崇長老が死去、雪斎も建仁寺から妙心寺へと修行場所を変え、後に妙心寺住持へと出世します。雪斎は今川家から招かれ、駿河国善徳寺・臨済寺を中心に今川家の軍師として、外交政策にも尽力します。また今川家の人質となっていた若き日の徳川家康は、この雪斎から教育を受けており、「家康の人生の師」としても著名です。

【参考文献】
黄龍十世録・東海一漚集(五山文学新集・玉村竹二編)、黄龍遺韻(伊藤東慎)、臨済宗史(玉村竹二)、五山禅林宗派図(玉村竹二)、大和町史(岐阜県大和町)、千葉縣香取郡誌(千葉県香取郡役所)、一休和尚年譜(今泉淑夫校注)、上総下総千葉一族(丸井敬司)、千葉氏探訪(鈴木佐)、「論文　臨済宗の香取地方への進出と下総板碑」(石井保満)、「論文　香取郡の人　龍山和尚」(田中久夫)ほか。

〈執筆者〉鈴木佐　禅僧史研究家　千葉県香取市(旧香取郡小見川町)出身　千葉県庁勤務の傍ら、関東武士団・千葉氏及び五山史並びに黄龍派・大覚派の禅僧について研究。